研究会報告(要約)(9)

里山の危機とグローバリゼーション

田中　滋

日本の多くの農山村において、今、里山は放置され死につつある。かつての姿を留めた「生きた里山」はもはや存在しないといっても過言ではなかろう。

かつての「生きた里山」の姿は、それがオーバーユースによって禿げ山となっていなければ、人間と身近な自然（山や森や川）との共存・共生の一つの姿を現している。すなわち、〈里山的な生物多様性〉とそれに依存した農山村における〈多種多様な生業〉とが持続的に共存する姿である。

〈里山的な生物多様性〉とは、農という営みを介しておこなわれる人々と山や森や川とのインターフェースが（山・森・川・農地に）生み出した二次的な生物多様性のことである。従来の生物学では、里山林は「二次林とよばれて価値の低い自然のように考えられ、長い間その研究対象とならなかった」（田端編『里山の自然』1997）が、京阪奈丘陵開発（関西学術文化研究都市建設）に対する反対運動の中で田端英雄等が注目したのが、この里山がもつ生物多様性であった。

そして、今、里山は一種のブームとなり、放置されその特有の生物多様性を失いつつある里山の再生に取り組む運動が日本各地で展開されている。しかし、それが放置され「危機」に曝された里山を再生することだけを目標とするならば残念なことである。「里山を守れ」という運動は、それが耕作放棄地の拡大や獣害そして過疎に苦しむ農山村の再生運動へとつながっていくことが是非とも望まれる。

本研究では、過疎に苦しむ農山村や放置された里山の現在の姿を日本の近現代史、特にその戦後史に立ち返って考察し、その再生可能性をより広い社会的文脈の中で考える。その際、第三世界や国家内部の周辺地域の置かれた困難な状況を記述する「モノカルチャー」や「国内植民地」などといった里山研究とは無縁とも思える概念を林業問題の分析に援用し、分析の深化を図りたい。